海外だより

外国の気象観測所めぐり（1）

これから数回にわたって世界のすみずみで日本人が訪れたことがあまりないような観測所を紹介してみたい．

Observatorio Meteorologico "Jose Fagnano"
——70°54′22″09 E, 53° 09′43″87 S, Chile——

1969年1月下旬，パタゴニヤ氷河探検を終えたわたしは南米大陸最南端の大都市プンタアレナスを訪問した．南半球のジェット気流に育くまれた真白のパタゴニヤ氷陸と南極大陸の間にあるマゼラン海峡付近は意外に緑の木や美しい花が多く，人口3万のこの都市は海上交通の要点にある自由港で店頭の品物も賑かである．このまちで発行されている新聞の一すみに「昨日の天気」という欄があり天気予報のかわりに簡単な昨日の気象記録がのっている．チリーでは気象庁は空軍に属していて世界最悪といわれるアンデスの空路をまもっているが，この記録は教会の名で発表されている．早速 "Jose Fagnano" という教会を訪問してみた．老神父さんに案内された教会の屋根裏のような部屋には代々の神父さんたちに大事にされて来たドイツ製のがっちりした器械が並んでいた．ここで出された "El Clima de Punta Avenas" という100頁ほどの本には1785年にはじまり，1834年の Fitz Roy 提督らによる記録も見られ，1888年から1940年までの各気象要素が入念に整理されており，異常気象時の自記紙のうつしまで載っている．1905年頃からの10年間が大変寒かったことや1893年，1928年の少雨，1900年の多雨，1935年頃の烈しい降雨の変動など，南半球最南端での100年にわたる気候の変動が細かく記録されている．その他，気圧，風速，日射，蒸発など代々の神父さんの忠実な記録を驚嘆しながら見ていると老神父が「お金があったら1940年以後の記録もまとめて発刊したいのですが，今は観測の自記紙を買うのもやっとなのです」と淋しそうに訴え，わたしは返事に困ってしまった．今は夏で一見おだやかな天気だが，世界の航海者から恐れられているこのマゼラン海峡ではどれだけの船が難破したであろうか．アジアからアリューシャンをまわってこの地に達したといわれている原住民インディオたちのところへスペインの軍隊と共に上陸して来た宣教師たちにとって住民に訴える方法としては海難防止が大きな課題であったのだろう．この一冊の本の中に当時の布教師たちの血が通っているような気がする．

（京大防災研　中島暢太郎）

小林禎作著

雪に魅せられた人びと

築地書館，1975，A5版，160頁，1,300円

ウイルソンA，ベントレーは1865年米国バーモント州ジェリコの農家の次男に生れ，1931年同地で没するまで，農業のかたわら雪結晶の美しさを世の人に伝えることを天職とこころがけて顕微鏡写真をとり続けた篤学の士である，

北大助教授で雪結晶の専門家である著者が，米国滞在中のある夏，家族をあげて往復，8,900 km の自動車大旅行を敢行するところから本書が始まる，それは，ベントレーが生涯を過したジェリコの村をメッカもうでするためであった，

小林一家のロマンを乗せてダッジ・コロネットは乾いた大陸をひた走る，この紀行文がはらむ異様なまでの熱気の本質は何であろうか，ベントレーの中に著者は自分の影を追ったのだろうか，それともベントレーに名を借りて，現在の気象界に，特に雲物理界に爆撃を加えようとるす著者の意気込みであろうか，

ベントレー撮影になる原写真，原論文，当時の新聞記者のベントレー訪問記事，ベントレーの姪御さんは健在でその人から著者に送られた手紙など，驚くべきほど貴重な資料を次々に駆使して，一介の農夫の身で現在の雲物理学に匹敵るす深さに到達したベントレーの姿が浮彫りされる，これを通じて，著者は無言のうちに，専門分化してともすれば大学や研究機関に頼り，学校教育によりかかって閉じこもろうとする気象界に活を入れようとしているのではないか，

本書の終りの方には，実験室で初めて雪をこしらえた中谷宇吉郎，江戸時代の殿様で雪華図説を著わした土井利位（としつら），方法序説の応用篇の一つレ・メテオールの中で雪結晶とアラレの形ならびに成因を論じたデカルトの物語が，簡潔な筆でまとめられている，

（駒林　誠）